活動報告

サント・トーマス大学看護学部の看護研修受け入れと学術協定締結

藤原 美智子（Michiko FUJIHARA）
荒川 満枝（Mitsue ARAKAWA）
鳥取看護大学 看護学部看護学科

はじめに

文部科学省（2005）は、「文部科学省における国際戦略」のＩ－１－２「『知』の拠点たる大学及び研究機関の国際競争力の強化」の中で、大学の国際化に関する指針とグローバル人材育成の必要性を述べている[1)]。鳥取看護大学（以下「本学」）は、ディプロマポリシーに「地域の概念に関し、ローカルからグローバルまで柔軟にとらえる視点を備えている」と明記している。この方針の下、本学では開学以来、外部資金による教員の研究活動を基盤にしてフィリピン共和国のサント・トーマス大学（University of Santo Tomas；以下「UST」）やマレーシアのマレーシア大学サバ校より看護教員を招聘し共同研究や講演会開催を行い、海外の看護系大学との関係性を形成してきた。構築されてきた信頼関係が発端となり、2017 年５月に UST より看護学部生の研修受け入れが可能かという問い合わせがあった。協議の結果、先の方針の下で本学として承諾の意志決定がなされ、鳥取看護大学・鳥取短期大学グローカルセンターが受け入れに全面的に協力することとなった。

本学としての研修受け入れの目的は、本学学生がフィリピン共和国の学生と触れ合うことで、海外の看護に興味を持ち、国際社会で生きる足掛かりをつくることであった。教員にとっても海外の看護研究者との触れ合いによって、その教育・研究の幅を拡大する機会とし、大学組織にとっては今後の国際交流活動の基盤としての国際交流協定締結のための相互理解の機会となると考えた。

2017 年度は、本学は設置進行年度３年目、グローカルセンターは開設の年であった。双方とも余裕のない中での受け入れであること、また先方からの打診から来日までの時間の余裕がないなど、準備は容易ではなかった。しかし、多くの教職員の厚い心のこもった協力と学校法人藤田学院（以下「法人」）からの寛大なサポートを得て、充実した研修を実現することができた。さらに、学生の看護研修受入れの成功により、かねてより打診していた学術協定締結が適うことなり、11 月 10 日、学生および教員の学術交流の促進のための協定書への署名が行われた。

本稿では、今後の継続的で活発な学術交流を意図して、2017 度の UST 学生の看護研修受け入れと学術協定締結の報告を行う。

１．サント・トーマス大学の紹介

UST は、フィリピン共和国の首都圏メトロマニラにある名門私立大学である[2)]。1611 年創立で、現存する大学の中ではアジア最古の大学であり、カトリックの大学の中では１つのキャンパス規模として世界最大である。神学部や哲学部、医学部など全部で 19 学部を擁し、約 44,000 人の学生、390 人の留学生が学ぶ。フィリピン共和国の英雄であるホセ・リサールをはじめ、歴代大統領や政治家、実業家、芸能人など多くの才能あふれる有名人を輩出している。

キャンパスには、創立当時のメインビルや正門が残っており、このメインビルの中にある博物館は旅行ガイドブックに掲載されるほど有名である。フィリピン共和国は、カトリック信者が多くローマ法王も訪問するが、UST は法王の訪問コースに必ず入っており、訪問時にはミサが行われる。

看護学部は、1946 年の設置で 72 年の歴史があり、１学年約 800 人の学生が看護を学ぶ。看護師国家試験の合格率は毎年 100%を維持し（全国の合格率は 40%程度）、優秀な看護師を大勢輩出している。2017 年 11 月の国家試験では、全国 10 位までの成績取得者の中に UST の学生が 12 人も含まれており、全国１位の成績であった。

２．研修受け入れの概要

（1）研修生について

研修生：UST３年生９名（男性１名、女性８名）

同行教員：２名

（2）研修受け入れのための本学側の準備

- 研修日時と内容に関する調整（UST と本学間）
- 日本国入国ビザ取得のための招へい人としての書類作成と UST への送付
- 修了証書の準備
- 看護研修先の調整（本学実習委員会および中部地区コーディネータ）
- 研修先である三朝温泉病院および介護老人保健施設ル・サンテリオンへの依頼公文書作成
- 研修先とのスケジュール調整、打合わせ、資料翻訳
- 宿泊施設検索、見積もりとコスト比較、予約とキャンセル対応
- 鳥取文化体験のアレンジ（スケジューリング、見積もりとコスト計算、予約）
- 大阪文化体験および京都文化体験のアレンジ（スケジューリング、見積もりとコスト計算、予約、コース設定、パンフレット収集）
- スクールバス使用依頼とスケジュール確保
- 居室確保と滞在中の飲食の準備
- 協力学生の募集・打ち合わせと司会指導
- 各プログラムの内容充実のための準備・調整

（3）研修期間中の概要

本学での研修プログラム及び来日中の概要は、次のとおりである。

7/9　フィリピン航空機にてマニラ出発～関西空港到着（本学国際交流委員長出迎え）
　　新大阪へ移動し宿泊（7/13 以降と同ホテル）

7/10　高速バスにて新大阪より倉吉へ移動
　　倉吉駅から本学（スクールバス）に移動、居室（K402）へ

学内表敬訪問（理事長、本学学長、鳥取短期大学学長、本学看護学部長、グローカルセンター長、法人事務局長）
鳥取県の紹介（Shery Megaly 先生）
ウェルカムパーティー
ファミリーロッジ旅籠屋（湯梨浜町）へ移動（スクールバス）、宿泊（13 日まで）

7/11　本学へ（スクールバス）
三朝温泉病院見学（スクールバス移動）
昼食（弁当）
本学ツアーと介護保険制度説明
介護老人保健施設ル・サンテリオン見学（スクールバス移動）
スクールバスで駅前へ、駅前の牛骨ラーメン店へ

7/12　本学へ（スクールバス）
実習室見学
鳥取文化体験と昼食（鳥取砂丘・砂の美術館；スクールバス使用）
修了式（修了証書授与、民族衣装でダンス）
お別れ会

7/13　倉吉バスセンターにて見送り
高速バスで大阪へ
大阪文化体験（着物と大阪城）
新大阪　ホテル泊（帰国まで）

7/14　ユニバーサルスタジオジャパンへ

7/15　京都にて文化体験

7/16　関西空港出発、フィリピン共和国へ帰国

３．研修プログラムの内容

（1）表敬訪問

本学学長、理事長、鳥取短期大学学長、本学学部長、グローカルセンター長、法人事務局長を表敬訪問し、本学からは道中の労いと歓迎の言葉が、UST からは訪問の喜びの言葉が交わされた。自己紹介の後には、法人内の両大学の文房具グッズとバッグが記念に贈呈され、学生たちは大変喜んでいた。

写真１　表敬訪問時の記念写真

（2）鳥取県の紹介

昨年度まで本学の英語科目を担当した Shery Megaly 先生に、鳥取県の紹介を依頼した。鳥取県在住の英語のネイティブスピーカーによるもので、訪問者の背景を考慮した県に対する興味を掻き立てる内容で、研修の始めの絶好のイントロダクションとなった。

（3）ウェルカムパーティー

来学初日の最後には、本学交流ホールにて、学生と教職員が参加したウェルカムパーティーを開催

した。１年生の２名が司会をし、ゲームをきっかけに会話が弾み、本学学生とUST学生が交流を深めることができた。また、本学ダンスサークル「TCN響」の15名が切れのあるダンスを披露し、USTの学生もリズムを取りながら楽しそうに観ていた。同じ看護を学ぶ学生同士の文化を超えた交流が行われたことは意義深い。

写真２　ウェルカムパーティーでの集合写真

本学学生のアンケートからは、「楽しかった」（６名）、「USTの学生さんがノリが良くて、楽しそうにしてくれたり、ダンスの時も手を叩いて盛り上げてくれた」と心から交流を楽しんだという感想や、「文化が違っても看護師を目指す学生と出会え親近感が湧き刺激になった」（３名）、「文化の交流が出来て、いい経験になった」（２名）、「USTの学生さんが下手な自分の英語を聞いてくれ、話してみることが大事と思った」などコミュニケーションを通じて刺激を受けたという意見、「英語力がなく、話すことが出来なかった、交流しても話が分からなかった」（２名）、「相手にどうしたら伝わるか考えながら関わると意外と難しい」、「英語コミュニケーション力をつけてもっと話してみたい」などコミュニケーションを通して自分の課題を明らかにできたという意見があった。「USTの学生たちが楽しそうで良かった」（２名）、「折り紙を喜んでくれたので、次は日本の遊びも入れるとより楽しんでもらえる」とUST学生に対する思いやりの気持ちを示す学生もいた。

写真３　三朝温泉病院にて

企画にあたっては、歓迎の気持ちを示し研修がより充実したものとなるよう意図し、学生と教職員が授業や業務の合間を縫って、軽食やドリンク、飾りつけなどの準備を行った。委員会メンバー以外にも快く準備を手伝う教員が多く、手作りの温かい会となった。司会は本学の１年生２名が快く引き受けてくれたが、教員ともども初めての経験であったため、何度も企画を練り直し、会話が弾むようなゲームを組み込んで当日に臨んだ。参加者の温かい協力により、USTの学生からもウェルカムパーティーがとても楽しかったという声が聞かれていた。

写真４　三朝温泉病院にて

（４）三朝温泉病院および介護老人保健施設ル・サンテリオン見学

病院見学として、鳥取県中部地区の特徴を生かした地域医療を展開している三朝温泉病院（三朝町）を訪問し、地域医療の現場を見ることができた。坂根裕子看護部長のレクチャーや、理学療法士の特徴ある実践活動の説

明から、地域の医療機関が住民に提供する医療について理解した。

介護老人保健施設「ル・サンテリオン」の見学では、矢間やすみ施設長のレクチャーとともに、介護保険制度の下で整えられてきた日本の高齢者の介護の現場を見学した。施設で暮らす日本の高齢者の生活を知るとともに、現場では、看護師、介護士、リハビリ関連の専門職などの多様な支援が存在することを実感した。また、民族衣装に着替えてダンスを披露し、入所者の方には大変喜ばれた。

写真５　ル・サンテリオンにて

いずれの施設でもUSTの学生たちは大歓迎で、USTの学生は大感激していた。また、現地で配付する資料も事前に時間の余裕をもって整えていただくことで、施設見学前にパワーポイントや資料の英訳を行うことができ、内容理解の支援を行うことができた。見学時は本学教員が立ち合い、施設職員の説明を随時翻訳したが、三朝温泉病院には英語が堪能な職員が存在し、英語で説明が行われた。UST学生にとっては学びの多い、貴重な見学となった。受け入れ先の施設からも、海外からの看護学生の見学は良い刺激になったとの声が聴かれ、相互交流の場ともなった。

（5）本学実習室見学

本学内では、基盤看護学実習室、成人看護学実習室、母性・小児看護学実習室の３カ所を見学した。あわせて、採血や注射のシミュレーター、モデル人形、洗髪車、介護用自助具などを見て、実際に触って使用方法についても確認していた。高齢者体験「おいたろう」の装着では、手足の動きが不自由で視力も低下している状態において、動作をする際の困難さを実感していた。また、妊婦体験ジャケットでは、妊婦の腹部の重さと大きさから、身体のバランスをとることの難しさを実感していた。

写真６　本学実習室にて

（6）鳥取文化体験

写真７　鳥取砂丘にて

写真８　砂の美術館にて

白兎海岸（鳥取市）では、日本海の眺望とともに海鮮丼などの海の幸を堪能した。その後、鳥取砂丘を訪れた。UST の学生は、日本に広大な砂丘があることに驚き、７月の暑さにもかかわらず元気にはしゃぎながら素足で馬の背を登り、楽しい時間を過ごした。砂丘には、ちょうど小学生の集団が学習のために訪れており、子どもたちとも触れ合うこともできた。砂丘に隣接する砂の美術館にも足を伸ばしたところ、「第 10 期展示アメリカ編」が開催中で、砂像を見学して楽しんだ。

このように、日本の暑い夏の最中ではあったが、自然あふれる観光地を自分の足で歩き、鳥取の人々とも触れ合い、食文化を体験することにより、鳥取の人々の暮らしをイメージしやすくなり、施設見学の理解を深めることにつながった。

（7）修了式

帰学後には修了式が行われた。UST 学生の一人ひとりに、英語と日本語の二か国語で明記された学長印とサイン入りの修了証書が、本学学長より手渡された。修了式には、本学学生や教職員も臨席し、厳かに執り行われ、修了証書を手にした学生たちはとても感激していた。

UST 学生からは、日本語による感謝のスピーチと、民族衣装で心のこもった歌と踊りが披露され、感謝の思いが伝えられた。臨席していた学生、教職員もたくさんの友人ができたことへの喜びを感じていた。その後、学生たちはしばらく英語でコミュニケーションをとって別れを惜しんでいた。

写真９　修了式の様子

写真 10　修了式を終えて

４．研修受け入れの本学にとっての意味

研修後、企画に参加した本学学生を対象としたアンケートを行った。回答した全員（13 名；有効回答率 65%）から、ウェルカムパーティーに参加し、よい刺激になったとの回答があった。「来年も研修員の受け入れの機会があれば、またこのような会に参加したり、企画運営を一緒にやってみたいか」という質問に対しては、「両方やってみたい」という学生が６名で、「もっと英語を学んだり、交流したり、違う文化を知ったりしたい」「ダンスだけでも楽しかったから、次は自分たちのアイデアで企画し、日本をもっともっと楽しんでもらいたい」「自身の経験も広がる」「企画運営に興味がある」などの意見が書かれていた。「企画は難しいが参加はしたい」という学生は７名で、参加したくないという学生はいなかった。

今回の研修受け入れに際しては、同じ看護を学ぶ本学学生と UST 学生の交流が図れることを念頭に企画を行った。ウェルカムパーティーに参加した本学学生は 20 名（３年 13 名、２年２名、１年５名）であった。急な呼びかけであったが、本学ダンスサークル「TCN 響」のメンバーのダンスを披露、１年生の司会挑戦という頼もしい協力を得た。修了式にも、そのうちの 10 名程度が参加し、UST の学生

による歌とダンスを見学できた。次回の受け入れの際には、早期に呼びかけを行い学生主体でウェルカムパーティーの企画運営ができるよう、国際交流委員会としてサポートしていきたいと考える。

５．UST との学術協定締結

2017 年 11 月 10 日、本学の近田敬子学長、グローカルセンター兼担研究員の田中響、本学国際交流委員長兼グローカルセンター兼担研究員 の荒川満枝がUST を訪問した。UST の看護学部長のオフィスで、マラヴィラ看護学部長とコルテス国際交流委員長に見守られる中、近田学長が学術交流のための協定書の署名式を行った。署名の後、近田学長とマラヴィラ学部長双方から、協定書を基盤に両大学の教員の交流による学術交流の促進を期待する挨拶が行われた。また近田学長から鳥取県の紹介をすると、マラヴィラ学部長は、「ぜひ鳥取看護大学を訪問したい」との意が表明された。署名式の後、近田学長から UST への友好の証として日本人形（尾山人形）が贈られると、マラヴィラ学部長、コルテス国際交流委員長は大変に喜ばれた。

写真 11　協定書への署名の様子

写真 12　日本人形の贈呈

署名式の後、広大な UST のキャンパス内を見学した。406 年の歴史を持つ正門やメインビルディングは荘厳で、学内にあるメイン図書館や教会も大変な趣のある建築物であった。附属病院では、診察を待つ大勢の患者であふれ、看護学部は整然と整備された教室や実習室があり、学生の学習成果の展示がなされていた。また本学の「まちの保健室」の様に、地域に出向いて健康に関する地域貢献を展開されている様子もうかがえ、我々のめざす看護の方向性が共通していることも感じることができた。今後、本学の教員や学生を派遣し、看護について互いの意見を交わす将来が見えてきた。

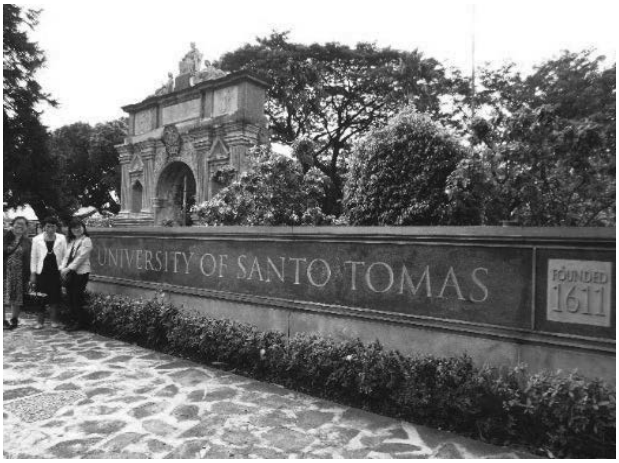

写真 13・14　サント・トーマス大学にて

謝辞：本研修プログラムにご協力いただいた三朝温泉病院、介護老人保健施設ル・サンテリオンの皆様に記して感謝申し上げます。また、プログラムの実施にあたってご理解をいただいた学校法人藤田学院、鳥取短期大学及び鳥取看護大学の教職員の皆様に感謝いたします。

追記：2017 年度の本学国際交流委員会のメンバーは、荒川満枝・藤原美智子・細田武伸・永見純子・伊藤順子・高橋真由美である。

≪注≫

1）文部科学省における国際戦略検討会「文部科学省における国際戦略」、平成 17 年９月

2）サント・トーマス大学ホームページ、http://www.ust.edu.ph/